本格的な読書を
―本格的な読書で読解力を身に着けるには―

開倫塾
塾長 林　明夫

Q：本格的な読書とは何ですか。

A：自分にとってこれぞという本を、じっくりと腰を落ち着かせてゆっくり読み込み、著者・作者との時空を超えた対話をすることです。

Q：読解力を身に着けるためには、本はどのように読んだらよいですか。

A：自分にとってこれぞという本は、一語一句をゆるがせにしないで、著者・作者の考え方や訴えたいことを「そうか、そういうことか」と十分に納得、理解しながら読むことです。意味や読み方がわからないことばが出てきたら、気持ちが悪いと思い、国語辞典や漢字(漢和)辞典、英和辞典や英英辞典などの辞書を用いて必ず調べることです。そして、調べた内容を意味調べノートやカードに書き写し、繰り返し音読練習や書き取り練習をすることです。また、人名や地名などの固有名詞には横に線をひくなどして十分に注意を払うこと、ノートに書き写すこともおすすめです。

Q：えっ、本を読むときにもノートを使うのですか。

A：(1)自分にとってこれぞという本を読むときには、ノートを一冊用意し、
(2)読み方や意味を辞書で調べたら書き写すこと。
(3)人名や地名などの固有名詞が出てきたら書き写すこと。
(4)読解力とは、このように、辞書さえあればどんな本でもきちんと理解できることです。抽象的・論理的に書かれた文章が辞書を活用してきちんと理解できること。これが読解力だと考えます。
(5)本を読んでいて大切な考え方だと思われるところには、線を引きながら読む。一章を読み終えたらもう一度読み返し、本当に大切だなと思ったところはノートに書き写すことです。

Q：随分、時間がかかりそうですね。

A：(1)人生は長いですから、自分にとってこれぞという本を読むのに焦ることはありません。大切な本であればあるほど、じっくりと腰を落ち着かせてゆっくり読み込みこと。そして、著者・作者との時間と空間を超えた対話、「時空を超えた対話」を心掛けましょう。
(2)内容のある本ほど、一度や二度読んだくらいでは、著者・作者が本当に伝えたいことがわからないことが多いです。その文章を読んでいる瞬間はわかったような感じがするだけで、しばらくするとその内容をすっかり忘れていることも多いです。

（3）ですから、自分にとってこの本は一生かけて読むに値する大切なものだと思われる「これぞという本」だけは、ノートを取りながら、時間を気にせずに行きつ戻りつ繰り返しじっくり読み込むことが大切です。

Q：例えば、林さんにとってはどのような本が「これぞという本」なのですか。

A：（1）私は中学 3 年生の頃から法律や政治・経済、国際関係が好きで、大学も慶應義塾大学法学部法律学科に行き、卒業後も開倫塾を創設する 29 歳まで大学の研究室に研究生として在籍、法律をはじめいろいろな分野の勉強をしていました。そのときに、法律の本はこれぞという著者を決め、辞書や六法全書で法律の条文を参照し、ノートを取りながら 1 ページずつ読んでいました。

（2）同じ著者でも何冊か本を出していますので、その著者の本を一冊読み終えて親しみがわいたり、基本的なところで「共感」できることが多いと、別の本が読みたくなります。大学を出て何年にもなりますが、昔勉強した先生の本が書店にあると、読んでみたいという強い衝動にかられます。

（3）開倫塾のある栃木県や茨城県、群馬県を舞台に社会の発展のために大活躍した二宮尊徳や田中正造の著作こそ、人名や地名、年代とともにじっくり読み込むに値します。

（4）松尾芭蕉の「奥の細道」を、栃木県のところだけでも地図帳を見ながらじっくり読み込むのも興味深いです。

（5）ブラジル リオデジャネイロでのオリンピック・パラリンピックでオリンピックに興味・関心がわいたら、ギリシャの古代オリンピックの本を読むこと、各スポーツの歴史の本を読むことです。

Q：最後に一言どうぞ。

A：これからのコンピュータや人工知能の時代で最も求められるのは、抽象的・論理的な文章を分析的に読み込む力や、ものごとを倫理的に考え、自分の考えを相手に伝える力です。その基本が辞書を用いての本格的な読書です。辞書を用いての本格的な読書なくして、コンピュータや人口知能の時代を生き抜くことは難しいとさえ思われます。

自分の未来は自分の力で切り開くためにも、どのような未知の分野の内容も辞書のみを用いて読み解くことのできる読解力を本格的な読書で身に着けていただきたいと希望いたします。

2016 年 8 月 10 日（水）記

（CRT とちぎ放送 2016 年 8 月 13 日放送内容、8 月 11 日（水）9:00 ～ CRT 栃木放送で収録）

（宇都宮大学大学院工学研究科客員教授）